

「クリスマス・メッセージ」

# クリスマスの希望

吉田 眞



キリストは、ご自分が十字架につけられる直前、弟子たちにこう言います。

「わたしは、平和をあな

たがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな。」(ヨハネによる福音書14章27節)

章27節)

あたかも、病の中にあっても、心配事があっても、得ることのできる魂の平安について語っているようです。

人間は、物が豊かにあれば、安心できると思います。

体が元気であれば、安全だと思えます。しかし、物は、いつでもなくなってしまう可能性をもっています。健康も、いつ取り去られるかわかりませんし、少なくとも、年を重ねれば、若い時には当然のように思えたことができなくなります。そして、必ず死ぬ時が来ます。

そのような中で、本当に「希望」をもって生きることが

できるのでしょうか。

実際にキリストは、私たちに生きる希望を与えるために、本当の魂の平安を与えるために、人間の姿をとって、この地上においてな

ったのです。聖書は、

「イエス・キリストの父な

る) 神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」(ヨハネによる福音書3章16節)

と書いています。人は、本当に自分を愛し、心に留め、大事に思ってくれる人がいることを知った時、生きることの意味を理解し、生きることによって希望をもつことができます。

愛していること、大事に思っていること、自分の一番大切なものを与えることの中に示されます。

神は、ご自分の子を与えるほどに、世を、すなわち私たち一人ひとりを愛されたことが、クリスマスに示されます。しかも、その神の子キリストが、私たち人間の経験するあらゆる経験を共にされたことの中に、その愛が更に示されます。

人は、自分と同じ経験、特に苦しい経験をした人に出会うと、それを共有し、共感し合うことができます。苦しみの中にある時、一番励まされるのは、同じ苦しみや悲しみを共有してくれている人がいることではないでしょうか。その時、不思議と、魂の平安を経験します。

キリストは、まさに私たちの悲しみや苦しみを共有してくださるのです。ですから、キリストの誕生は、父

なる神が私たちを愛してくださっていること、しるしであり、キリストの生涯は、神がいつも私たちと一緒にいてくださること、しるしです。

究極は、三十年余の生涯の最後に、キリストが、私たちの弱さ(罪)を担って十字架で死なれたことの中に、神がキリストを世に遣わされたことの意味と、神が私たちを心に留めておられること、しるしを見ること、しるしと見ることができるといふことです。その時、物の豊かさや健康であることが与えることのできない——別な表現をすれば、貧しさの中で、病の中で、なお魂の平安を得ることのできる——希望をもつことができるのです。

このクリスマス、読者の皆さんが、本当の「安らかさ」を経験する「希望」をもって、人生を歩み始めていただきたいと心から願います。キリストが皆さんの心に誕生する時、それが実現するのです。

(救世軍士官「伝道者」司令官)



最近聞いた講演の中で、「安らか」には三つの側面がある。それは、体の安全、心の安心、魂の平安である」とありました。体が健康でない時、心配事がある時、生きていくことの意味を感じることができない時、確かに不安になるでしょう。

「三つの側面」とは、三つの種類の「安らかさ」があるというのではなく、これらの側面が、お互いに影響し合って、「安らかさ」を生み出している、あるいは、

「安らかさ」を損なっているということなので、体が健康でない時、心が不安になるでしょう。病気で、今までできていたことができなくなったり、生きていくことの意味がなくなったりかのように感じられるかもしれません。このように三つの側面を総合して、「安らかさ」を経験できるのです。しかし、病気であっても、「安らか」である人もいますし、「何もできなくても」魂の平安を

得ている人もいます。

クリスマスは、イエス・キリストの誕生をお祝いする日です。聖書は、キリストを、その誕生の時に「平和の君」と呼んでいます。しかし、そのキリストは、人々からののしられ、最後には、傷つけられ、十字架につけられます。人の目には、決して、平和な生涯を送ったとは思えません。「平和」「平安」に、特別な意味があるのでしょうか？

[クリスマス・メッセージ]

# クリスマスの抱擁



大将 リンダ・ボンド

買い物客でこつた返す商店街、一人の男の子が、不安そうな顔をして立っているのを見つけた。迷子になってしまったようです。一生懸命、自分の知っている顔を探しています。クリスマスの時期です。家族からはぐれてしまうには、一番悪い季節です。

でも、そばの救世軍の社会鍋に立っていた私は、一人のお年寄りに気がつきました。男の子は気がつかなかったようですが、そのお年寄りは、じつと、男の子を見つめていました。わたしは、「あの男の子のおじいさんかな」と思いました。お年寄りとお年寄りの目が会いました。お年寄りは、走り寄って、男の子を抱きしめて言いました。

「迷子になってしまったと思っただろう？ そんなことはないよ、大丈夫だよ。ずっと、どこにいるか見ていたんだよ！」  
男の子を叱ることもなく、お説教もしませんでした。

たくさんの人にとって、クリスマスは、自分が一人ぼっちだと感じさせられる時になっています。家族の交わり、楽しかった思い出、町中が祝っている姿、それらが、「私の生活はこうでは

なかった」と、自分の孤独を思わせてしまうのです。多分、それだから、救世軍が一年の中で、一番クリスマスに焦点を当てるのかもしれない。地域の人を招いての食事会、子どもたちへのおもちゃの贈り物、それらは、一人ぼっちではないよと伝え、クリスマスの精神を实际的な形で表す方法なのかもしれません。

でも、そのようなことをしても、壊れてしまった人生を修復することも、心の奥底の傷を癒すこともできません。このクリスマスの時期に、一番孤独を感じているのは、決して、経済的に困っている人ではないことに驚くことがあります。往々にして、心が傷つき、孤独でいるように感じている人は、経済的には不自由のない人であることがあります。

聖書の中に、ザアカイという人が登場します。彼は金持ちでした。ところが、税金を取り立てる徴税人という職業だったので、みんなから嫌われ、無視されていました。しかし、イエス様は、あのお年寄りのように、いつも、ザアカイを見ていたのです。そして、ザアカイの人生を一変させるような方法で、ザアカイに

近づかれたのです。ザアカイのような「罪人」と、一緒に食事をしようとした時、人々はイエス様を批判しました。その時、イエス様は、ご自分が、失われた人を救うために、この世にいられたことを宣言されたのです（ルカによる福音書19章10節）。

ザアカイは、人をだまして金儲けをするような人間から、気前の良い、信頼できる市民へと変えられたのです。どうしてそのようなことが起こったのでしょうか？ 人前で恥をかかされ、批判され、よそ者のように思わされたからではありません。それは、イエス様が、ザアカイにいつも目を向けていたからなのです。イエス様は、ザアカイを、尊厳をもって取り扱われました。ザアカイが変わり得ることを知っておられたのです。

クリスマスのお話を聞いて、それを懐かしい物語のように思うだけにならないようにしてください。イエス様の誕生を、おとぎ話のように見てしまつて、その中に含まれている力強いメッセージを見落としてはなりません。神様が人の形を取つて、人間の生活空間に入られ、人間とその創造者との関係を修復されたのです。

ある人たちは、自分が失われた存在であるという自覚はないかもしれませんが、でも、自分の理想をなくし、価値や希望を失っていることは、認める人もいます。愛、他者に対する愛を失つてしまつて、それを認めるのは難しいことでしょう。誰にでも、それを認めるよう求めることはできないかもしれません。しかし、あの男の子のように、群衆の中で、誰にも注意を払ってもらえないように思い、誰かに見つけてほしいと感じることはあるでしょう。

クリスマスは、世の救い主の到来です。失われた人々を捜し求め、彼らを抱きしめ、これまで想像すらしたこともないような、つながりを回復させてくださる「救い主」の到来なのです。

**救世軍 第19代大将**

**リンダ・ボンド プロフィール**

国際的組織である救世軍の最高指導者。カナダ生まれ。1969年に救世軍士官（伝道者）となり、カナダ、英国、万国本営などでの奉仕を経て、アメリカ西部軍国司令官（最高責任者）、万国本営の霊的成長センター及び万国超教派関連担当部長、オーストラリア東部軍国の司令官を歴任し、現在に至る。歴代3人目の女性大将。

（救世軍士官（伝道者）・万国総督）

# 東日本大震災復興支援リポート

二〇一一年九月〜二〇一二年十一月

昨年三月十一日に起こった未曾有の災害、東日本大震災、そして続いた原発事故から一年八カ月が経とうとしています。被災地では、被災後二度目の冬を迎えようとしています。少しずつ復興のきざしが見えています。所もありませんが、依然がれきの山はそのまま、先の見通しも立たずに、将来に対する不安を抱えたまま年越しをしなければならぬ人々も大勢おられます。

救世軍では、国際的なネットワークを生かして、昨年九月頃から、被災地の復興のために、大きなプロジェクトにも携わってききました。

昨年十一月から今年にかけて宮城県女川漁協に作業船三十隻を贈呈。今年十一月には、女川の離島「出島」に緊急搬送船及び漁場監視船を贈呈。気仙沼漁協には、作業用のテントやパワーゲート付トラックや潜水具などを提供しました。



女川漁協には、30隻の作業船と緊急搬送船及び漁場監視船が贈呈された



作業船の進水式（女川町塚浜で）



贈呈した作業船には、「多くの方々から寄せられた善意を、救世軍が形にさせていただきました」との文言で、プレートが取り付けられている



気仙沼漁協に贈呈されたパワーゲート付トラック



「南三陸さんさん商店街」内の救世軍が支援したフードコート。全天候型なので、1年中、様々なイベントや、買い物客の休憩所、食事場所などとして有効に用いられている



「おおふなと夢商店街」。商店を連結するウッドデッキや植栽、ベンチ、電気看板などを支援



「希望の鐘商店街」オープニングには、救世軍のブラスバンドが演奏



女川の離島「出島」で、地元のニーズを聞く救世軍国際本部からのスタッフ



津波で壊されて使えないウイッチ



「おおふなと夢商店街」を視察



夏の暑さの中、企画された「夏祭り」は、地元の住民も参加し、良い交流の場になった



支援の届きにくい場所にも温かい食事を届ける



障がい者支援施設に花のプレゼント



陸前高田市の広田保育園には、度々訪問、園児の安全と成長のため、できるだけ支援をしている

また、三つの町（岩手県大船渡市、宮城県南三陸町、女川町）での仮設店舗建設の支援にも携わりました。昨年十二月には、「おおふなと夢商店街」、今年二月には、大雪の中、「南三陸さんさん商店街」、そして四月には、女川「希望の鐘商店街」がオープンしました。これらの支援は、主にアメリカの救世軍によるものです。これらの商店街は、仮設ながら地元の人々の生活にとって必要な場となっています。今年の十月には、横浜・東京地区から、被災地視察と、復興に少しでも役立つようにと、これらの商店街へ「復興支援買い物ツアー」が企画・実施されました。

今年八月には、救世軍万国本営（ロンドン）緊急支援部からスタッフが派遣され、それまでになされた支援プロジェクトの報告と会計検査、そして被災地での支援状況確認の視察がおこなわれました。その結果、大きなプロジェクトから小規模なものまで、救世軍によって提供されてきたものが、現在も有効に用いられていることが確認されました。

その視察によって、さらに現地のニーズが新たにわかり、その後、女川漁港の出島への新しいウイッチ設置の支援、岩手県陸前高田市の保育園の仮園舎の補修など、具体的な支援がなされたもの、また現在検討中のももあります。これまで、総額約七・五億円近い資金が支援のために用いられています。

救世軍は、物的支援だけでなく、精神的なケアの必要に応える支援もおこなっています。子ども会やブラスバンドによるコンサート、仮設住宅に住む人々と地域に住む人々の交流のきっかけをつくる食事会の提供などのほか、夏には、「救世軍夏祭り」を地元の人々のボランティアの協力も得ておこないました。今年もクリスマスには、音楽やプレゼントをもって仮設住宅を訪問します。

一方、災害対応教育の必要が叫ばれ、今年七月には、キリスト教界のつながりの中でJEA（日本福音同盟）による災害対応チャプレン・プログラムフォーラムが開かれました。このために講師として、アメリカから救世軍災害支援コーディネーターのケビン・エラーズ氏が来日し、被災地の視察と、被災者との交流もしました。この教育プログラムは、エラーズ氏が作成した教材を日本の現状に合わせて作り、これをテキストに、来年二月に学びの機会がもたれることになっています。

## 音楽家から寄せられた善意 —いくつかのエピソードより—



☆ 2011年4月、東京の日比谷公会堂で、あのY.M.O.で有名なミュージシャン細野晴臣さんのコンサートがありました。そのコンサートの合間に、社会鍋がロビーに立ち、震災の救援活動のためのアピールをしました。これは、細野さんご自身からの要請で実現したものです。震災後、渋谷の駅頭に出された社会鍋。その傍らで吹いていたラッパの演奏が、たまたま細野さんの新しいCDのためのプロモーションビデオ用に撮影した映像に写っていました。それを見た細野さんが、自分のコンサートの時に社会鍋に来てもらいたい、と思われたのが、きっかけでした。



コンサート後、細野さんと奉仕者



来場した多くの方が社会鍋に協力してくださりました

## 被災地でこんなこと、ありました —去年、クリスマスができた訳—



「お坊さんはクリスマスをやってくれたのに、救世軍はやってくれないの？」

2011年8月、陸前高田市にある障がい者支援施設の作業支援のため、救世軍の奉仕者が、大船渡市にある仮設住宅を訪ね、この施設の子どもたちと一緒にソフトクリーム販売をしていました。その時、一人の女性から声をかけられました。「この場所を助けてほしい」と。



ソフトクリームの販売支援

この女性にとって、初めて聞く『救世軍』という名前。初めて接する『キリスト教』。制服姿の奉仕者に声をかけるには大変な覚悟が必要でした。その覚悟を後押ししたのが、友

☆ 2012年7月、東京・神田神保町にある救世軍で、チャリティーコンサート「絆」が開かれました。メインゲストとして出演したニューヨーク・フィルハーモニックの首席トランペット奏者フィリップ・スミスさんは、共演したTHE MOST（トランペット奏者6人で編成）と救世軍ジャパン・スタッフ・バンド（J S B）の演奏に加わり、華麗で温かなサウンドを響かせました。スミスさんは、かつて救世軍のバンドで活躍したこともあり、プログラムにはなかった賛美歌のソロ演奏をJ S Bの伴奏でしました。その前に、「今回の震災で心を痛めている。自分のできる支援をする責任を感じている。神様はそれを助けてくださる。たとえ何が起ころうとも、私は神様を信頼し続ける。なぜなら、神様は今までもずっと誠実な方であったから」と語って、クリスチャン演奏家としての証しをし、コンサートの収益を復興支援活動のために献げられました。また、翌日おこなわれた、オペラシティ（初台）でのコンサートでも、コンサートの収益の一部を被災地の音楽復興支援のために、と救世軍に寄付していただきました。



スミスさんとTHE MOSTの皆さん



J S Bと共に演奏するスミスさん



語るスミスさん

人の証言でした。女性の友人は、救世軍がどのような団体で、どのような人々かを熱心に伝えてくれました。この友人は、障がい者支援施設にいる青年のお母さんでした。先の女性は、何も知らない救世軍をこの友人の証言によって信じてくれたのです。

仮設住宅に生活するすべての家族のためにクリスマスをしてほしい、との要請は、救世軍にとって、新たな支援の場が開かれるきっかけとなりました。そして去年の12月、この永沢仮設住宅の皆さんに、キャンティーンカーで調理した釜揚げパスタとバンドの演奏をプレゼントし、仮設住宅で初めてのクリスマスの礼拝がおこなわれました。皆さんにとって、神様に、救世軍に、パスタに驚くクリスマスとなりました。



仮設住宅での初めてのクリスマス

それ以来、度々伺うようになり、このつながりは、今も続いています。



好評だった釜揚げパスタ

## 社会鍋の働き

救世軍では、緊急災害時の支援活動や、各種の支援活動のために、年末や災害が起こった時に募金をおこなっています。昨年、東日本大震災発生直後も、各地で社会鍋が立てられ、募金がおこなわれました。



三脚につるした鍋と紅白のたすきが目印の「社会鍋」のルーツは一九〇六（明治三十九）年に始まった「慰問かご」です。これは、日露戦争直後で失業者が多かった当時、最も暮らしにくい年末年始のために、餅やミカン、足袋などをかごに入れて貧しい家庭に配った正月のプレゼントでした。一九〇九年からは失業者救済対策として、アメリカの救世軍でおこなわれていた「クリスマス・ケトル（スノーブ壺）」と呼ばれる募金方法をヒントに、三脚に鉄鍋をつるして街頭募金をするスタイルになりました。

この集金鍋は、「慈善鍋」「社会鍋」と名前を変えながら、寄せられた献金の用途も広がってきました。現在では、国内外的様々な救援活動（災害被災者や街頭生活者への支援）や支援活動（障がい者作業所、女性保護、更生事業、病人、母子家庭、高齢者など）のために用いられています。

年末の風物詩ともなっているこの社会鍋を、今年も十二月十日過ぎから三十日まで、全国の主要都市で展開いたします。皆様のご理解、ご協力を、よろしくお願いいたします。